

らない家族関係を、誰が思うままに廃棄させたのであろうか。

自由という民主制の美名のもとに、その方向をどうしてエゴに帰結せしめたのであろうか。共存共栄の社会理念は、各自に分散した個の群集でしかなかった。

個人のエゴは集団のエゴに、地域のエゴから、種別のエゴに、それらの葛藤が増大してまさに群雄割拠の再現である。願共諸衆生の理念は、永遠の理想でなければならぬい立場を、厳格に把握し直さねばならない。国家を破壊し、文化の革命を行って、はたして是に代るよりよき新生国家であるであらうか。

破壊するものも人間であり、革命するものも同じ人間であることの基本を忘れてはならない。

要はその人間自体の発見であり、人間自体への研究である。その人間の自覚にもとづく覚他の仏道実践こそ、現代人を救う大道であることを、現代即応の態勢において、創意工夫する自他平等界を第三の教化接点として挺身しなければならぬと考えるのである。

われわれが仏教によつて育成し、仏教によつて実をあげようとする福祉社会は、過激者によつて壊されるものであつてはならない。また彼等を出させるものでもない。だからこそ仏教教化の接触と、その浸透によつてこそ、達成されねばならない。

福祉社会の構成は、僧伽の精神を基調として形成されるがゆえにこそ、相互扶助による理想的な衆生縁の集団生活である。自利々他の衆団生活は、互譲の精神によつて、平等であり、偏重な福祉社会ではない。

現代社会における過激群のさまざまな現象は、仏教と隔絶し、離反せるがゆえに生

じた結果であることを、あえて考え、精神の空洞がいかに危険であるかを、改めて見直すために、現代社会の事例として過激派問題を考えたのである。

そしてこの事例によつて、仏教に根ざした社会福祉の使命と、それへの要請をもたらしことができればとの願いのほかにはない。

いよいよ仏教が新しく見直され、ますます時代がこれを要請し、そして人心は仏教の社会福祉によつてこそ、真の安寧を得ることであらう。

このゆえにこそ「仏教福祉」の充実発展の意義があり、またその期待が大きいのである。

仏教福祉考

高橋 憲 昭

(大谷大学助教授)

以前から数回にわたり、折角、執筆の機会を与えられていながら、今日までそれに

おこたえできずにいた。それは、毎日の仕事が多忙であるということにもよるが、実

の所、それにも増して私が不勉強であつたからである。特に社会福祉学は、一般に私のやつてゐる社会学に近い學問とみられながら殆んど勉強ができていない。今度、やつと書かせていただく氣になつたのは、社会福祉学について、私なりに納得のゆく勉強ができたからではない。依然として忙しく、その方面の研究も進んでいない。このことからすれば、またおことわりするのが自然である。しかし、今度は、以前と事情が少し違つてゐた。というのは、心のどこかに何かを書かせて貰いたいという、強い氣持ちが生まれてきてゐたのである。それが何であるか、私にもわからない。少しばかり大げさにいえば、僧籍にある自分というものを、今やつと *first sight* に考えられるようになったということであらうか。

或は今まで、寺を生活の場としながら、無為に生きてきたことへの反省からくるものかも知れぬ。ともあれ、それは僧籍にある者として、必ず、直面しなければならぬ仏教と実践の問題について、私なりに一つの姿勢を決めておかねばならないという心の動きのようにも思えるのである。とはいつて

も、先にのべたように、福祉学には詳しくない。したがつてここに書かせて貰うことは、私が日頃考えながら、未だ十分に整理されてゐない、漠々としたものであり、混沌としたものである。その混沌としたものが、混沌のままで終つてしまふのか、或は、そこから、何かが生まれてくるのか、今の私にはわからない。しかし、たとえ、混沌のままで終ろうとも、それはそれでいい。いつまでも持ち続けねばならぬ大切な「混沌」だと思つてゐる。

ところで、「仏教福祉学」という場合と「仏教福祉」とでは、そこに基本的な違いがある。前者は、それが學問として、特に科学としての独立性を保とうとするなら、独自の対象と方法をもたねばならぬことはもちろんである。

つまりその対象は、仏教の理念によつて裏づけられた福祉現象であり、それへのアプローチは、科学方法論の最も初歩的な掟である *Wet frei* でなされるわけである。

仏教福祉現象の分析から、もし、法則性が引き出せるとすれば、それは、もちろん *empiric* の法則であるはずである。それに対し、

「仏教福祉」といった場合、それは、科学としての仏教福祉学が対象とする仏教福祉現象を指す一面をもつとともに、強く、実践への志向性を含んでゐるように思う。そのことは、私たちが「仏教福祉」が十分に行きとどいてゐる」とか「いない」とか、そういう言葉を使う事実によつても明らかである。そこには、或る明確な価値を規準とした *Sollan* 的志向がある。また、そうでなければならぬ。

あらゆる學問は、それが、直接的にか、間接的にかの差はあるにせよ、究極は、人間の幸福のためにある。特に福祉学は、人間の社会での、相対的なものではあろうが、幸福という事象をとり扱う學問であるだけに人間の幸福への直接的な結びつきを求めようとする。しかし、それへの志向のために、*Wet frei* の學問の秩序を乱すことは許されない。仏教福祉学が、人間を幸福にするための、より有効な理論的武器として、洗練されたものになるためにも、そうである必要がある。

ただ、先にのべた、「仏教福祉」という言葉が含む実践への志向性は、仏教福祉

学の体系から全く排除することはできないのではない。何らかの位置づけがその体系の中に与えられることが必要であり、また、それは、不可能なことではないと思われる。つまり、仏教福祉学を二分野で構成する単純な考え方である。

第一の分野は、仏教的理念によつて裏づけられた福祉現象を *Sein* として研究する分野である。ここには、福祉を必要とする社会の構造や機能の分析も含まれるだろう。

第二の分野は、仏教とか、キリスト教とかにかかわりなく、福祉を進めるための最も合理的な手段を研究する分野、端的に言えば、技術学の領域である。そして、この両者は、相互関係をもつ。第一の分野の発展は、当然、第二の分野にも有効に作用する。これは、いわば、基礎医学と臨床医学にたとえることもできようか。そして、第二の分野は、第一のものよりは、技術的側面で、直接、人間の生活につながる度合いが強いのは自明である。

以上は、素人の混沌とした一つの考えかたをのべたものにすぎない。或は専門家からみれば、ミミズのたわごとであるかもしれぬ。当り前のことを当り前にいったということであるかもしれないし、或は、すでに専門の領域では淘汰されている常識論であるかもしれない。

だがしかし、正直な所、私にとつては、以上のような仏教福祉の学問論議以上に、更に大切と思える問題がある。それは、いかに、仏教福祉学の性格や構造が明らかにされ、実践的方法が確立されようとも、それは、単に一つの理論であり、技術論であるにすぎないということについてである。

けだし、理論は、あくまでも、実践への妥当な方向性を示すにすぎず、実践行動への起動力を与えるものではない。私が指摘したいのは、まさにその点である。

実践行動への起動力をもたぬ仏教福祉学は、その力を減ずるだろう。ではその起動力は、どのようにして得られるのか。実践への起動力は、理論の中にあるのではない。それは、情念のなかにある。実践は情念によつて動く。そして、また、情念によつて理論は生き、情念は理論によつて尊ばれる。

では、情念はどこから来るのか。本来、

仏教は、「学」ではなく、人間の生きる核につながり、仏教的理念は、実践と一体不可分の関係にある。したがって、仏教を体得した人間にとつてみれば、福祉への実践は、おのずから自己自身のうちに表われるはずである。

こうして、いま、私に対して最も切実性をもつて迫ってくるのは、実践行動への起動力としての仏教的情念の問題である。この情念を自分のものとすることができるかが、私にとって最も重要な事柄なのである。そしてまた、最初にのべた私のなかの「混沌」の間の深さも、このことにかかわる困難さと苦しみにつながっているものもあった。

☆	☆	☆
☆	☆	☆
☆	☆	☆